

## ウクレレ演奏の再獲得により生活変容に至った脳卒中後遺症の1例

### ～リハビリ職と音楽療法士の連携による介入～

青木 大悟<sup>1)</sup> 藤田 真介<sup>1)</sup> 今村 優子<sup>2)</sup> 河野 小雪紀<sup>2)</sup> 風晴 俊之<sup>3)</sup>  
美原 盤<sup>4)</sup>

1) 公益財団法人脳血管研究所 介護老人保健施設アルボース リハビリテーション科

2) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 音楽療法科

3) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 リハビリテーション科

4) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 院長

[目的]老健で実施される通所リハビリは、利用者のADL向上のみならず社会参加に積極的に働きかけることが求められる。当施設では利用者の希望に添った趣味活動を支援することにより、社会参加を促す一助としている。今回、病前に趣味としていたウクレレ演奏の再開に対し、リハビリ職と音楽療法士が連携して支援したことにより、楽器演奏が可能となるに留まらず、生活範囲の拡大が図れた脳卒中後遺症の1例を経験したので報告する。

[対象]症例は72歳男性、心原性脳塞栓症により重度の右片麻痺と失語症を呈し、併設病院に入院。122病日に自宅退院し(要介護3)、当施設の通所リハビリを週3回の頻度で利用開始した。利用開始時、右上下肢に中等度の麻痺と中等度の失語症を呈し、ADLに軽度の介助を要しており、自宅では通所リハビリに通う以外、外出する機会はなかった。病前は地域活動や趣味であるウクレレ演奏を行なうなど活動的な生活を送っていたが、この時点では主体的な行動は見られず、「この手が動けば」などの悲観的な発言が多く聞かれていた。

[方法]通所リハビリで開催されるリハビリ会議において、症例からウクレレ演奏をしたいという希望が聞かれた。そこで、ウクレレ演奏が再獲得され、活動的な生活を送ることを目標にリハビリ職と音楽療法士が連携して介入した。そこでまず、音楽療法士が本人の病前に弾いていた楽曲を聴取し、本人の情緒面および身体機能を配慮した楽曲選択を行った。リハビリ職は右上肢の訓練を行うとともに、右上肢が機能しやすいよう座面や手の位置固定、自助具の選定などを行った。音楽療法士とリハビリ職は症例の演奏能力に応じ、話し合いながら楽曲および環境の変更をしていった。

[経過と結果]介入当初、右上肢がうまく動かないことに苛立ちを見せていたが、徐々に成功体験が増えるにつれ、麻痺に対する悲観の声は聞かれなくなってきた。半年後には歌唱しながら「ふるさと」を弾けるようになった。それまでは、音楽療法士が楽曲の選択を行い、

演奏を促していたが、この頃より自ら弾いてみたい楽曲を歌集から探して練習を行なうなど徐々に主体性も見られるようになってきた。介入から1年後には、身体機能や動作能力の改善が見られ、自宅で自主練習も行うようになり、さらに「もっとたくさんの曲を弾きたい」と希望するようになり、好きなアーティストの歌集を本屋に買いに行くなど外出機会が増え、生活範囲の拡大も認めた。

[考察]本症例に対して実施された支援は、趣味の再獲得のみならず主体的生活を引き出し、生活範囲の拡大を促した。生活期のリハビリの一つとして、リハビリ職と音楽療法士の連携は音楽療法の可能性を示唆するものと考えられる。